

## 「子供を世に送りだした親の責任」

エッセイスト 風間佳

先日、あまりに天気が良かったので、公園にふと立ち寄った。  
ベンチに座って小一時間ぼんやりしていた。

公園には母親達が小さい子供を連れて遊びに来ていた。  
母親達は楽しそうにおしゃべりをし、子供達はその子の年齢なりの遊びをしていた。  
母親達は、時々子供に声をかけたり、注意したりしながら、ずっとしゃべっている。

そういえば、いつかTVでやっていた。  
小さな子供を持つ母親にとって、公園はひとつの社交場であり、  
はじめてその社交場に参加することを『公園デビュー』と言うらしい。  
その番組の中では、上手く『公園デビュー』ができない母親が悩んでいた。  
そう言われれば、何となく輪ができていて新参者が入りにくい雰囲気もあるなあ…、  
などと思いながら、その風景をいつとき眺めていた。

何気なく眺めていて、「ああ、そうなんだ」と気がついた。  
子供は親がいなければ本当に何もできないんだ、ということに改めて思った。  
あたり前のことだが、本当に何ひとつできないのだ。  
人間の小さな子供というのは、半人前どころか、全く未熟な生き物なのだ。  
そこに母親がいなければ、子供は安心して遊ぶこともできないのだ。  
他の動物たちに比べて何と未熟な段階で生まれてくることか。  
母親達はただおしゃべりをしているように見えるが、  
実は子供を保護しているのだ。正真正銘、子供の保護者なのだ。

・・・となると、もし、親に何かあった場合、  
この小さい子供はどうやって生きていくのだろうか。  
人間の子供には、一体いくつまで保護者が必要なのだろうか。  
「親の保障は親としての責任だ」と言われるが、  
子供を世に送り出したのが親ならば、  
子供が自力で生きていけるようになるまで、保護者が必要でなくなるまで、  
それまでの保障は、本当に、親としての責任なのかもしれないと思った。

E1B-0031-hosho